

三村申吾青森県知事 講演会

テーマ「ふるさとの再生・新生—生活創造社会を目指して—」

日時：平成16年7月27日（火）

場所：秋田県庁第二庁舎8階大会議室

講演

【はじめに】

青森県知事の三村申吾でございます。

まずは、さっそくですが、来年の秋に世界自然遺産・白神山地で、秋田県の皆様方の全面的なご協力をいただき、第2回の世界自然遺産会議を行うことになっております。10月15日から17日までということで、お互いに白神という素晴らしい資源を持っていることを大いにPR出来ればと思っております。

私共青森県と秋田県との繋がりと言えば、この間大阪でアンテナショップを共同で開設したことがあります。アンテナショップを一緒に出しますと、手慣れている岩手県が5割位の売り上げを占めるんだそうですけれども、今回は青森も秋田も気合が入っていきまして、ナマハゲ君が来て大活躍するなど、どんどん物が売れるのではないかと思います。秋田には比内地鶏がありますが、私共にもシャモロックというのがあります。シャモとプリマスロックを掛け合わせたものです。皇室御用達でもあるのですが、量が少なく市場にあまり出ていなかった。これを一般にも売ろうということになりました。販売が始まったところ、大阪では、やっぱりお互い競い合うのでしょうか、某グループに納入を決めてきましたとか、洋菓子店にリンゴとかジャムの納入を決めてきましたとか、物を売ることについて今もの凄く競争ですね。

また、シンガポール、ソウルにも共同で事務所を出している訳ですが、岩手の知事さんから、韓国の方も景気がすっかり戻ったし、ジャパンプームもあるので、秋にソウルでまた何か売ろうという話もあります。ソウルの話ですけど、私共もソウルとの定期航空路線を持っていますから、その営業に歩いているんですが、「マサムネが欲しい」と言われました。マサムネ、マサムネって何かかと。マサムネハクチョウ（正宗白鳥）なんてそんな古い筈ないし、「十和田ハトマサムネって酒のことか」と聞いたら、「そうそう酒、酒、日本の酒」と。秋田では、お酒用のこまち「秋田酒こまち」を作りました。我々も「華想い」という酒造好適米を作りまして、一斉にメーカー20何社がお酒を作ったら去年は全部売り切れました。ということで、お互いに地域ブランドづくりを頑張らなければいけないなと思っております。

自己紹介をということでございました。

青森には、南部と津軽があり、言葉が分かれています。自分は今青森市に住んでいますが、買い物に行っても微妙なニュアンスが分からないんですよね。私は南部、要するに岩手に近い方、

太平洋側の生まれ育ちであります。百石町、百の石と書くんですが奥入瀬川の河口の町で生まれました。橋本龍太郎さんが、フランス大統領のシラクさんとドイツのシュレーダーさんに、日本の酒ではこれが一番だとして贈ったという「杉玉」という酒や、「桃川」という酒を造っている町です。

思い出したので、別の話ですが、フランス大使館が今、北東北の3県合体構想とか、いろんな地方自治のあり方に興味を持っていて、調査しています。恐らく秋田の方には明後日来ると思いますが、フランスは面白い国ですね。6日間かけて東北全県を歩いて、県庁だけではなくて民間企業からもいろいろ調査するんだそうです。フランスと言えば核融合、イーターの誘致を競っています。完全にうちの勝ちだと思っていたら大統領が乗り込んできて、膠着状態が続き、フランスと日本とが一步も譲らずという状態になっております。そのフランスが来たものですから当然その話かなと思ったら、地方分権の話だということでした。

私元々は純文学をやっておりました。本当に生粋の純文学です。東大文学部の国文科で、平家物語におけるいろいろな思想、要するに無常がどうしたとか和歌、短歌。5・7・5・7・7がどうしたこうしたとかいうことをやっていたのです。その中で家内と出会い、私がやっぱり働かなきゃいけないだろうと。というか学力に差があって家内は大学院に順調に行けたんですけども、私の場合は主任教授が「三村君ね、中でやるよりも外でやった方が性格向いていると思うよ」と言われてそうかなと思って、新潮社という所に行きました。新潮社というとフォーカスと週刊誌ばかりが目立ちますが、あそこは元々、純文学の会社です。その中の出版部、本当の純文学、ハードカバーをやっておまして、人で言えば山口瞳さんとか、秋田の関係では南極探検の白瀬さんのことを網淵謙錠さんという人とやりました。畑山博さんや、中沢けいさんとかもそうです。高村薫さんとも付き合いがあります。彼女は、私と関係なしに、青森を舞台に小説を日本経済新聞に書いているんですけども、いやあよくここまで調べて書いているもんだと思います。ともあれ、そういう純文学をやってきました。

それが親父が20年ばかり町長をやっているで、親父の後、別な方がやったんですけども亡くなったものですから、町長を35歳でやりました。その時日本一若かったんですよ。そして、包括ケアシステム、日本でも何番目かの早い時期に立ち上げましたし、新しい教育の仕組みとかを作ったんです。で、地方の声を県や国は分かっていない、そう思っていました、町長の時は。基礎的自治体しかも町ですから人口が小さい訳ですが、常に我々の本当に感じている痛みとか本当にやりたい事、本当の思いというものを分かってくれないんじゃないかと。やっぱりこれから地方主権だと、小さい政府にして大きな地方主権だと。我々のふる里の声、地方の声を主張しますと。小選挙区制度が始まったものですから、そのスローガンで衆議院選挙に出馬しました。始まっていなければ黙って町長やって合併問題を今頃やっていた所です。1回目700票差で落選しまして、殆ど努力が足りなかったんですけど。次は当選したんですが、その後、何だかんだしている間に青森県いろいろございまして。急遽知事選に出馬したんですが、激戦というか、世論調査で全然駄目だと。困ったな、また負けてられないなと思って、この明るいスピーチで一生懸命歩きました。やっぱりいかにセールスするかですよ。これから大事なのは行政もセールスです。先般、熊谷喜八さんについてきた方がいて、「オメェ知事やってねえでうちこねえか、3,000万円てどうだ」と。「3,000万円って今まだ現職ですから、次考えさせていただきます」と。

「そうかオメエもつたいない、政治なんかやってるより商売やってガツパガツパ儲けた方がいいんでないか」と。「いやあ純文学をもう1回やりたいなと思っているんですけど」と言ったら、「そんな儲かんねえことやるより、一生懸命もの売ったらおもしれえど、売った買った、売った買ったって、こんな生き生きとしたこと何でやんねえんだ。勿体ないな」と言われたんですけども、やっぱり政治は今、面白い、というか、やっぱり自分は地方自治が好きなんだと改めて思っております。というのは町長は4年間でした。その間、議会は少数与党でしたけれども何とかご協力をいただいて、1人1人の顔が見える町づくりを一生懸命やりました。人口1万の町でした。中学校は1つ、小学校が2つ、保育園がなく、負担が軽かったものですから、借金が少なかった。町づくりというものをやってみて、人口1万となりますと学校でもどこでも常に回って歩ける、常に話が出来た。中学生とも話をするし小学生とでも話をする。町づくり、未来はどうあるべきか、そのことを考えながら一生懸命やりました。その過程の中でこのままでいいのかと、こんな日本でいいのかと。地方をこのまま置き去りにしている日本でいいのかという思いで国会に行きました。国会では、現横浜市長の中田宏さんと会派を組んだんですけども、中田さんは途中で横浜市長になると。「負けるんじゃない」と言う。「負けてもいいよ、思いっきりやろうよ。若いから」ということで、今横浜の市長をやっています。その市長の仕事振りを見て、やっぱり地方自治っていいなと。その1年後に青森県知事選に出馬することになり、中田さんが応援に来てくれたんです。それぞれ地方から、この日本の国というものを何らかの形で変えていこうよと。変えていくためにいろんな努力をしようよという約束をして一緒に仕事をしています。ふり返ってみればそういう流れで、純文学から思いがけず政治に入ったものですから、みんなに言われるんです、お前は考え方がどうしてそう文学的なんだと。割り切っていかなきゃいけないと言われるんですけども、日本にも文学とか歴史とか哲学とか詩とか分かる政治家がいてもいいのではないかという思いがあります。ただ、編集の方だったもので、自分で書くと言うよりも、書かせるのがこの調子ですから上手くてですね、原稿を取ってくる天才と呼ばれました。あの書かない人をよく落としてきたとか、よくこんな早く取ったという形でしたが、なるほどいろんな意味で営業マンに向いているなと思っております。町長時代からそうでしたけれども、トップセールスマンであるという気持ちですし、トップサービスマンであるという気持ちも忘れない思いでおります。

【知事就任から1年】

去年7月、青森県知事に就任しました。財政が悪いということは聞いておったんですけども、それでも回っていると思って県庁に入ってみましたら、約1兆2,500億円の借金。借金は怖くないですけども、もう回せなくなっている部分がありまして、それに対処しなければ去年の段階で2年か3年後に財政再建団体に落ちるという状況でした。昨年1年間は、田子町の日本最大の産廃問題を岩手県と共同で対応することと、財政をどう立て直すかということでした。自分は選挙で知事に選ばれましたけれども、県職員にしても、皆さん分かる通り、このまま青森県を潰してしまうことは出来ないという思いは共通。財政再建団体になるといろんな事業も全部止まる。共にとりあえず今、手詰まりの2,000億円を何とかしようということで、最終的に職員の方々には400億円、給与を役職毎に返納していただき、私はカット2割でいこうと。400億円をそうい

う形でやる。そして、過剰な形で箱物の計画とかあったものを、もう工事しているものも、「設計屋さん、これおかしいんじゃないか、これ過剰設計じゃないか、適切な設計になるべきではないのか」と言って数億円を削っていただくとか、いろんな形で目途を付けました。もう厳しい1年間でした。なんでもぶった切る知事だと言われて、世論調査は凄いですよ。支持率は30%位。それでもやっているとというのは、間違っただけはやっていない、真っ向から勝負してやっているぞという気持ちでやっているからだと思います。朝日新聞の調査では55%、地元紙の調査では30%がよく働いているなという評価で、県を潰さないというのが分かってくれたかなと、本気でやっているというのが分かってくれたかなとは思っているのです。ともあれ2,000億円返すためのプランを作りました。しかしながら凄いですね政府は。1月に予算編成が全部終わってヤレヤレとしていたら、青森の場合あと230億円位歳出をカットしなければいけないというのが来りました。圧縮するもの、機構改革出来るものはして、公共事業に至っては実質3~4割をカットということになります。従ってどうやって青森県の経済を失速させないかという事が最大の問題だったんですが、別な分野での活路ということで、観光の分野とかに見出そうと段取りをしています。ともあれそこまで思い切ったプランを出しまして、県議会からも県民の皆様方からもそれなりの御了承をいただいて進んでおりますが、第2弾の大改革を行うことにしました。今後、市町村合併が進んでくる訳ですから、県庁内の組織機構も単に統合・再編するだけでなく、人員も何処にどう必要か、県としてやるべきことは何なのか、そこまで突き詰めて、さらに将来的な道州制に対応するためにも、自分達がきちんとした形になっていなければと考えています。特に、自分達の「不渡り」になっている部分だけはきちんと解消すべく、5年間で綺麗に片付けようという大改革に今、手をつけております。

そのための特別対策局を作ったのですが、局長を呼んで、俺と一緒に思いっきりやろうと。財政再建団体になればもうにっちもさっちもいかないんだし、それよりは綺麗に改革を成し遂げて永続する。県民の皆様方に少なくともサービス出来る形の青森県を残そうよと。そういう気持ちで一緒にやってくれないかとお願ひし、「やる」という事で今その第2弾の改革のプランを書いております。プランを見て本当に俺を首にする気かというようなプランを作ってきてはいますが、ただ、やっぱりここまでやらなければいけないんだと思うんですよ。国、県、市町村そのものを考えてみて下さい。税金で運営する部分にやはり経費が掛かり過ぎている。この部分をどう軽くしていくか。交付税を12%カットされ、それでも耐えようと思ったのは、国がぶっ飛んだならば国債がぶっ飛んだならば、もうそれどころではない。これはある程度やっぱり呑まなきゃいけないだろう。青森県に住んでくれている人達のために、どういう形で行政として仕事出来るのか。税の話をする、石原都知事に、お前の所は自主財源が3割かそこらで後は交付税じゃないかと言われるのですが、そうじゃございませんよ。例えばエンジンを考えて下さい。エンジンを作るためには、資源、担い手も必要だし健全な土地、綺麗な水も必要だし、その中で1本のエンジンがこうして出来ています。それを支えているのは人であり集落であり農村社会であり、そういった仕組みであります。従って、いわゆる交付税について、食料自給率を観点にして財源調整をやるべきじゃないかと提案したんです。秋田も同じだと思うんですけども、土づくり水づくり作物づくりだけじゃなくて、人づくり、学校に入れて育てて全部石原都知事に貢献しているようなものです。首都圏とかに育てて出している。それは人間だけじゃなくて農作物も同じです。我々が地域、地方自治体を運営していくうえで、人づくりはもちろんのこと、その社会基盤を守

っていくという点で交付税がこれまで役に立ってきた。だからこそ、それぞれ食料生産県、人も供給しています。そういうところについては、新たな交付税措置というものをやるべきだということで、前回知事会で提案したのです。あの時はもう義務教育とか順番をどうやるということだけで終わってしまったので、新たな交付税措置の話までは至らなかったのですが、今後ともそういう主張はしていきたいと思っております。

【地域経済の活性化】

もう1つ青森県だけの極端な特徴があるんですよ。有効求人倍率、秋田の場合は先月0.58でしたか、それでもみなさん低いと思っているでしょうけれど、青森県の場合は0.3台をずっと独走しております。沖縄県と最下位のやりとりをしているのですが、就労の場がない。有効求人倍率0.3ということは100人で30人しか働けない。確かに本県は出稼ぎ県であり、その部分公共投資等で国が補ってくれていた県であった訳ですけども、それにしても岩手・秋田それぞれが0.5を超えている段階において、何故これだけ低いのか。やっぱり製造業なんですね。青森の場合、ものを造るのはどちらかと言えば建設・公共事業関連。技術力が高いという状況もあるのですが、農業を担う者が建設関連で長く来た。これは私共の政治のあり方の転換をしなければいけないだと思っております。

そこで、環境・エネルギー産業創造特区を八戸から下北半島のエリアで申請し、認定をいただくことが出来ました。六ヶ所村の核燃料サイクル施設に関連して、エネルギー面の研究開発が進められていますが、むしろこれからは分散型の電源として、燃料電池とか、太陽光・風力そういった日本の国で賄えるもので電源を確保していく仕組み、それも単発ではなくていろんなものを組み合わせることが重要です。そこで八戸で、風力と太陽光、太陽電池とバイオマスと下水、要するに下水の汚泥でガスを出してそれで回すガスタービンという形を組み合わせ、小学校、市役所の電源、熱源を供給する実証試験を進めています。ユニットを上手く組み、コストを下げられれば、集落単位、私の町人口1万の町程度は一つのマイクロ発電システムで補っていく。で、例えばそういうパッケージを作って国内外にパテントとして売っていく。エネルギー関連の技術については、水素をやる時にはあれを作らなければならない、これを作らなければならないというような規制があるんですけど、規制を全部取っ払ってどんどん皆さんやりませんか、エネルギー関連の新分野やりませんかと言ってきています。産業を育成していくためには、重厚長大とか巨大な発電所も絶対必要ですが、家庭関連とか農業関連とかは分散型でやれる。分散型でやれる部分の研究・実証を青森県でやりませんかとフォーラムを大阪・東京等でやり、大変な引き合いが来ておまして、新しい物づくり分野、今から出来る物づくりといえればそういうエネルギー関連だろうと考えています。

そして、津軽は米とリンゴです。リンゴは絶対的に品質に自信があります。米についてはあきたこまちを一生懸命学ばせていただいているんですけども、青森の場合はブランド米というよりもブレンド米として一流というか、吉野家の牛丼は青森の米を混ぜると最高に良いんですよと凄い誉められて、青森は混ぜると美味しい米を作っているんです。一方、青森県は建設業の占める割合が非常に高く、その中で国も県も市町村も公共事業についてはこういう状態です。それで今、進めておりますのが、特区制度を活用し、会社・企業が農業に取り組むということです。

【攻めの農林水産業】

私は、攻めの農林水産業ということを知事就任以来、打ちまくっております。その攻めの農林水産業とは何か。秋田、岩手もそうなのですが、我々は本当に安全で安心できるしかも美味しいものを作っております。私共で言えばリンゴは当然ご存知だと思いますけれども、ナガイモも台湾でえらい高く売れるんです。さらに、ニンニク、ホタテ貝、1kg1万円のマグロ、イカ、ヒラメもあります。最近と一緒にハタハタの禁漁をしておりましたら良いように捕れます。一緒に資源管理していけば絶対大丈夫です。だからトロール漁業、底引きもう少し遠慮してくれという話をしています。私共の地域はこれらの良い物を作っております、捕っております。しかも夏季冷涼、青森の場合特に夏季冷涼です。冷房がいない位。ということは農薬の使用量は極端に少ない訳です。夏季冷涼な気候に恵まれていますし、海も汚染度が低い訳ですから、良い形でプランクトンを養って小魚がドンドンと育ち生態系が上手く行っている訳です。我々はやはり農林水産業においては一流県なんではないか。ただ、あまりに良い物を作っていたものだから流通のことに気持ちをいたさなかった。あるいはPR・販売・マーケティングということを特に考えなかった。作れば売れる、作れば売れるでいいんでないかと。これまで私共も秋田もそうですけれど、研究開発でもものすごく良い種を作るんですが作るだけ。後はアリの的に作ってます、作ってまっただけだった。また、商工労働部がそれなりにいろいろな物を買ってきたんですが、漆塗りとかありますから杉も一緒に売ってきた。さらに観光の関係、地産地消を含め、グリーンツーリズムを含め、観光部があってもそれぞれバラバラ。そこでこれらを1つにしよう、ワンストップサービスでやれるようにと総合販売戦略課を設置しました。課長が田村というのでみんな田村商事、田村商事と呼んでいます。本当に商事会社の感覚です。朝集まると社訓を唱えて「今日も県民のために儲けましょう」とやっているんですよ。いつの間に商人になったんだと聞くと、「いや私はもう県庁職員ではございません、一商人として一生懸命仲買を務めております」と言います。そうなったのには訳がありまして、公募で総合販売戦略課というのを作るから何でもマーケティングして何でも売って県民に儲けをとったら、課長に3人、その他一般職員にも120人位の応募が来ました。課長1人、課員35人という形で発足したんですけれど、みんな次々次々こう売りたい、ああ売りたい、こうしたいということをやっています。8月5日のみのもんたの番組を見て下さい。青森で開発した毛豆というのがあるんですが、それをみのもんたが“思いっきりテレビ”でやるんです。そういう形でいろんなメディアに露出過多という位どどんみんな出してくれるようになっておりました。「やりたくてこの課に来たんだから、自分達が一生懸命PRをします。その代わり知事もどういう場面でも私達に頼まれたら来て下さい」と。だから私もリンゴのチャンチャンコを着て、中にマグロのTシャツを着て、ヨーカドーのトップセールスに立ったりします。県が今、ものすごい危機だと言うことをみんな理解してきました。去年いろいろ話し合っ、やっぱり我々が県民の皆さんにいろいろな事をして一生懸命やる、青森県そのものが県民のために今頑張るということを見せたいと思います。

また、県庁内の意識を高めるためにベンチャー制度、権限・財源を与えるという制度を作ったところ、いろんな応募がありました。「まるごとあおもり情報発信チーム」というのですが、これ

はこれまで完全なゲリラ戦でやっていたのですが、ここで遂に公開してしまいます。エージェント5人、県庁職員ですけれども、ノルマは5億で、何とかの新聞に載ったら広告換算がナンボだナンボだとその累計でいこうと。今もう5,000万までいきました。向かないことやって体壊したらどうすると聞くと、「いやぁ倒れてもいいです、これやらなかったら公務員として後悔します。絶対やらせて下さい」という連中が次々来たものですから、じゃあやってみるかその代わり2年だぞと。出す金はこうだからその代わり5億は回収しろよと、広告費換算ですよ。

県庁の職員それぞれが、どうやったら自分の立場で県を立て直すとか良くしていけるか、県民の方々に理解していただけるかという活動を一生懸命しております。

さて、攻めの農林水産業、この分野については秋田・岩手と3県共同でやりたいなと思っております。いいものをきちんとした水準で出す。例えば、トマトはもの凄い評価が高いです。トマトをもっと出してくれと言われてます。あと、絹さや。関西に行って言われたんですけれども、市場を全部自分で回って歩いた途中、「青森の絹さや良いんですわ、どうして出してくれまへんのか、うちにもっと出して下さい。もうあれなら何万でも買いませ」と、そういう形で我々の良い物が、こういう物があつたぞと。そういうものをどう売っていくかということ、先ほどの総合販売戦略課というものを一つの起爆剤にして一次産業からいろんな方向性を見出そうということで今進めております。

【あおもり達者村】

また、いわゆるグリーンツーリズム、秋田でも非常に盛んではございますが、私共は「あおもり達者村」というものを、岩手県との近くに名川町という所があるんですが、山紫水明、本当に自分も桃源郷というのはこういう所だなと思うんですが、ここで開村することにしてます。テレビでやっておりますダッシュ村というのをご存知だと思いますが、職員提案で私達も青森ダッシュ村をやりたいんですとの話がありました。それをやったらコピーの問題で訴えられるから何か適当な名前にしようと言ったら、「達者村！青森に来たら地産地消で良い物を食べてみんな達者になると思います」と。非常に安直だけど良い名前だなと。安心・安全・美味しいで長期滞在、本当の意味でのスローライフ・スローフード、一番良い時期に青森の一番美味しい物を食べてもらうという仕組みをつくることにしています。その達者村を開村することにしましたら、旅行会社というのは面白いですね。すぐ聞きつけてJR東日本でもJTBでも参加してくれています。長くこの達者村に留まっても、あるいはいくらでも土地はお世話出来るものですから、住んでくれても良いですよ。みんな疲れていますね、東京の方々。物書きの連中でも田舎の何処かでのんびりして、土見ながら自分で何かちょこちょこっと耕しながら、そこで半定住、半々行き来してでも暮らしてみたいという思いがあるようです。そのトレンドに合わせた訳ではありませんが、自分の一番近い世界、文芸の世界とかそういう世界の方々の声も聞いて、「あおもり達者村」ということを今進めることにしております。加えて地産地消、そして何よりも自分のふる里のものを食べて健康であれよと、地産地消運動をもの凄く今一生懸命やっています。良い物であるけれどお互いに気が付かない、自分の地域の良い物を自分達が食べて健康になって、なおかつそれをどんどんPRする。これが大事なことです。

青森は全国一の短命県でございます。医者が足りなくて、九州とか大阪の方とか医師探しに歩くんですけども、弘前大学のOB達が、短命県というけれども青森の場合は元気である期間がもの凄く長くて、食いたくだけ食って飲みたいだけ飲んでバタッとですから、青森の人ってそういう意味では幸せだなと言います。それでも知事として全国一短命県というのはいくら何でも返上したいものですから、啓蒙普及・減塩運動とか医療問題も含めてやらせてもらっています。乳児死亡率も全国一、自殺率については秋田さんと1位・2位を争っていることもあり、8月から命を大切にする県民運動をやろうと思っています。例の長崎・佐世保の、「アイス食べて良いんだよ、遊んで良いんだよ」ってあの子どもが可哀相で、とにかくお父さんのあの手記を見て、命というのはリセット出来ないものだ。命を大切にする県民運動をやりながら、減塩運動や健康づくりも進めようと思っています。

さらに、職員提案で、県庁がディーゼル発電をやると2,000万円か3,000万円毎年安く出来るし、周辺の融雪、要するに熱が沢山あるので雪を溶かすことも出来るという形で行けますよというものもありました。あと、ファシリティーマネジメントの提案がありました。また、橋をいろいろ直すというのを職員が持ってきたんですけども、「知事、メンテナンスで900億円儲かりますよ」と。50年で900億円です。橋はメンテナンスすると50年以上持たせられると。その研究をしようというのも職員が持ってきました。

職員の方々がアイデアが出来た、話を教えたい聞いて欲しいと次々持ってきてくれます。これは非常に有難い事だと思っていますし、素晴らしい傾向が出て来たと思っています。青森県は今、職員が考え、コストダウンして経費を掛けない青森県にして、次の世代、次の若い下の世代が絶対生き延びるようにするために今やらせていただきますという形。上もそうですけれども皆様の年代、今日は若い方々が多い訳ですけども、その方々がアイデアを持ってくるんですよ。これほどのアイデアのある人材を何故使わないで来たのか。どんどん使おうという姿勢を示した訳でございまして、そのことで次々とアイデアが来ています。

【北東北の未来】

青森県の改革というよりもこの北東北それぞれ何かをなしていくとすれば、やっぱり職員の方々だと思っています。その意味において、3県のいろんな勉強会でも職員の皆さんが次々とアイデアを出してくれている。県外事務所の共同化、シンガポールにしてもソウルにしても、北海道、名古屋、大阪、博多もそうです。また、3県のランドデザイン、未来はこうあるべきだという事を書いている訳ですが、私は大いに今日おいで秋田県庁の皆様方にも期待しております。秋田、岩手、青森、交通体系がそれなりに整ってきました。交通体系と言えば、秋田の知事さんに青森の道路はどうなっているんだとこの間すごい責められた事がありました。ドライブ好きですよ秋田の知事さん。今日はそうだ青森に行ってみようと思ったら、途中で高速道路が無くなっている。何でここだけ無いんだという所が26kmあって、下北行ってマグロ食ってみようと思ったら、途中で道路、いわゆる高規格道路がないんですよ。何故かパカッと切れている所がありまして困っているんです。道路の体系も整い交通の体系もだんだん整ってくる中で、大きな流れとしての道州制。自分自身が訴え続けてきたのは小さな政府、大きな地方主権とそし

て叶うべくは道州制というのでしょうか、東北がどういう形にまとまるかは分かりませんが、まとまれる時期がくれば素晴らしいなという事を思いながらここまで来た人間であります。ただ青森県の場合、まだ県民の方々のコンセンサス、あるいは議会に対してどういう形の事を勉強しているか研究しているかという事もございませぬし、現実問題とすれば市町村合併だけでも今は手一杯という状況がありまして、どう進めていくかというのは厳しいものがあると思っております。公の業務、県の業務というものが、市町村の合併で30万の中核市なりが出来ることによって、いろいろ移ります。そういう事がどんどん進んで参りますと恐らく間違いなく大きな流れとして、今後は道州制の議論に入っていく時期になる。確かに法律上は出来ないという事になる訳ですけども、現実には様々な業務で提携しております。業務を提携することによってお互いの県のあり方あるいはお互いの県の考え方がいろいろ分かる訳ですし、その中で職員の方々が信頼し合える状況にあれば、それは何よりも職員もそれぞれの県民ですし、そこから良い方向性というのでしょうか、大きな形で北東北を考えようということが出て来るのではないかなと思います。歴史をふり返ってみれば、秋田にしても私共青森にしても岩手にしても北海道にしても、縄文という時代があり、それぞれ素晴らしい交流をし、その中で栄えた。文化的にもいろんな独自の文化を持ち、そしてまた生産力が高く栄えていたという時期がありました。先ほどフランス大使館がいろいろ調査しに来た話をしましたが、あのガリガリの中央集権のフランスがこれからは地方分権、地方主権の時代だということで権限を渡す法律、憲法を改正して法律を作ったそうです。間違いなくそれぞれの地域がそれぞれの地域で努力していく、そういう日本になっていくのではないかなと思っています。日本の国も東京がぶっ飛んだら全部終わりだという状態であってはいけない。ブロック単位、九州なら九州、四国・中国なら四国・中国、近畿圏なら近畿圏、東北地域は東北地域、それぞれが一つのユニットとしてこの日本を動かしていくという時期に向かって行かなければいけないと思っております。であればこそ、私共青森県の場合、民間企業的に言えば2,000億円の手形ジャンプの始末をきちんとしなければいけないし、自分達の地域の自立性、自主・自立を整えなければいけないということを考えている次第です。

それぞれの県の職員の皆様方が地域をもう一度見つめ直し、地域づくりを自分達が行うんだという気持ちにどんどんなって下されば、これ程の素晴らしい資源はありません。少なくとも青森県庁は今、そういう形で団結し、まとまって頑張っていくという流れが、この1年をかけて出て参りました。しかしながらいろんな分野がございませぬ。それぞれの分野のそれぞれの努力に対して、どのように私共が答えていくかという事になる訳ですが、私は常々こう申し上げております。「天が見ていなくても、県民が見ていなくても、自分が自分を見ている筈だ。自分が見て納得の出来る仕事をお互いにしよう。天見ず、地見ずとも我が見る。それぞれが公務員として公の立場にある者として努力する。俺はやったよ、これをやるよという思いで頑張ってくれないか」と。今、青森県の再生・新生ということに全力で、本当に全力で頑張っております。自分自身が率先して何処にでも出掛け、セールスにも立ち、営業にも立ち、出先の機関も一回りしたんです。まだ足りないと思っておりますけれども、やりながらまた若い方々と話をし、「みなさんの青森県ですよ、皆さんの青森県庁ですよ。20代・30代の皆さんが先々に渡って公業務、県の仕事を行っていくために、今何をそれぞれ工夫しなければいけないのでしょうか、あるいは今何をそれぞれ少しずつ我慢していかなければいけないのでしょうか、あるいはその思いをどうやって県民に伝えなければいけないのでしょうか、そのことを共に考えませぬか。アイディアは可能な限りどんどん出し

ていただいて、知事として選びますけれども活かして行きたいと思います。同じ仕事をするなら面白くやりましょう、一緒に青森県を元気にしましょう」ということを話しながらの地域づくりに努力させていただいております。

ともあれ秋田の皆様方とは、いろんな意味において一緒の部分があります。職員の行き来もあります。お互いに学校の行き来もある。いろんな意味で一緒でございます。3県合同の勉強会も行っております。職員それぞれの思い、そしてそれが県民の皆様方それぞれの思いに繋がり、そのことが青森県のみならず秋田県のみならず日本の再生・新生というか、地域から地方から日本を変えるとすれば、我々北東北3県の試みというものは非常に有益なもの、大きな価値があるものだと考えております。

【生活創造社会】

秋田県庁の皆様方、そしてまた県民の皆様方、共にこの日本の国で北辺の地である訳ですが、素晴らしい風土でございます。秋田も同じでしょうけれども、雪っこ解ければ、タラの芽やふきのとうを採り、ある時はまたタケノコを採ったり、そして海に行けばいろいろ釣れる。良い水資源があって良いお酒があってやっぱり良いですよ。ストレスフリーというか非常に少ない部分があります。我々北辺の地の問題は、常に財源・財政の問題と就労の場ということになるんでしょうけれども、考えてみれば生活を創造していくには素晴らしい北東北であります。よって「生活創造社会」。暮らしという観点に立った場合に、「足らざるを憂えず、等しからざるもあえて憂えず」だと。我々には素晴らしいこの地域資源があるじゃないか、良い山があって良い海があって良い川があって平野も良いし、人、人間と人間との付き合いの仕方がすごく良い。ここでどのようにそれぞれの暮らしの中で、それぞれの豊かさと幸せというものを考えていくか。それが問題なのではないか。行政として出来る限りの事、それは財政の問題と就労の場、働く場をきちんと提供することですが、その部分については最大限努力しますけれども、地域の皆さんは生活をそれぞれが創造してくれませんか。生活をクリエイティブしませんかと。我々の地域は良いですよ、素晴らしい場所なんです。確かにディズニーランドはないですし、ハワイもない、新宿もなければ渋谷もなければ銀座もないですけど、良い地域じゃございませんかと。人として生きる場として良い場所じゃないですか、それぞれ工夫してくれませんかということで今後とも北東北の素晴らしさを訴えていきたいと思っております。

それでは時間になりましたので終わらせていただきますが、ご質問等があればお答えをさせていただきます。本日は誠に静聴ありがとうございました。

質 疑 応 答

質問者1：今日はトップシークレットも含めいろいろなお話しをご披露いただきまして有難うございます。特に関心を持ちましたのが、知事は何度も職員が沢山のアイデアを持って来てくれ

るんだとおっしゃいました。秋田の県庁においても当然そのキャパシティはあると思うのですが、なかなかそれはシステムとして仕組みとしてそういうものがないと、いくら危機感を共有していてもなかなか知事の所に持っていくのは難しいんじゃないかと思うのですが、そこの辺りの仕組み・システムというものは何か作られたんじゃないかと思うんですが。

三村知事：ベンチャー制度枠というのと、ふるさと再生・新生枠と言って要するに従来の予算と全く別の切り口で提案してくれという枠を作って、その話を聞くよと。従来は予算編成の時に話を聞いて、切るか付けるかだったのですけれども、そうじゃなくて提案のコンペを何回かやるようにしています。その分、実は外回りが減って怒られているんですけど、いわゆる何とか大会とかに行かないで、行くよりも話を聞く方が面白いですから。そういう形で外回りをちょっと減らして中の方を一生懸命やっているという気持ちです。

質問者 1：そういう今のコンペ式というか、それを作っただけで出てくるものでしょうか。

三村知事：元々みんな言いたい事はあった訳ですよ。それから権限・財源を与えるというのはやっぱり面白いでしょう。それと、ふるさと再生・新生枠という部分については、今までためていたアイデアがあるのだけれどもいわゆるやりくりで出来なかったと。あらゆるものを殆ど凍結し削って作った数十億という枠でこれをやるという事にしたものですから、提案する方とすればあれをやりたかったんだという事がある訳ですよ。そういう事を持ってきてくれるようにやっています。部長達だけではなく、課長もとにかく知事室に、自分でもどンドン声をかけるんですが、どンドン出入りをしてくれるようにと。来ればなるだけ冗談を一発言ってから、まずしゃべろやという形でやっております。

質問者 2：青森県さんの場合、青森市と弘前市と八戸市というのがそれぞれ一定の規模がありまして、県内全体のいわゆる均衡ある発展というのでしょうかいろいろ競い合いながら地域を盛り上げながらという風土があると思います。秋田県の場合は残念ながらそういう環境にない訳ですけども、秋田市のみがちょっと大きいという。今、市町村合併でまた変わってはくと思うのですが、その辺で何かご教示いただける部分がございますでしょうか。

三村知事：確かに、青森の場合は青森、八戸と弘前があります。青森は交通の要所であり、北海道への窓口というのと県庁があるという事で急激に伸びたんですけども、八戸は新産業都市あるいは水産の大本拠地であり、弘前は昔からの学園都市としての発展ということがあって、3つがいろんな意味で競い合ってきたと思います。これからの合併が今、難しくなっている部分があるんですけど、青森は30万を超える形になるのかな、八戸も5つでやるか7つでやるか数によって30万いくかいかないかがあります。弘前地域はまた津軽全体の組み替えをやっているのですが、間違いなく新たなそれぞれの発展というのですか、そういうことが出てくると思います。昔、東北地建の局長をやった人達と、東北の場合はまだ、都市基盤そのものが明確に居住の分野、農業の分野とか工業の分野とかに出来ていない部分があるので、上手くコンパクトにそれぞれの都市を造って、それを交通体系で結んで競い合う形で強い構造、1つだけだと倒れた時に全部いく

ので、強い構造で造っていく事が出来ないかという勉強会をやってきましたんですけれども、青森の場合はその3つの街を核として、もう一つ、むつという市がちょっと離れた所にあるんですけれども、人口は少ないですけれども完全に地域の中核になっているものですから、むつを加えてそれぞれがいろんな産業の分野を仕分けして競い合うということを今後も続けていくことになるのかなと思っております。本当に気候風土が全然地域毎に違うんですよ。八甲田山、岩木山あり恐山ありと山というものがこんなに気候風土、産業も含めて分けるのかと思うんです。確かに秋田さんの場合は秋田市という大本山があってということになるんですけれども、しかし横手だって知事が一生懸命市長をやってきたのですから、いろんな工夫があるはずですし、また我々と接しております大館を含めて各地域において、いろんな地域おこしが可能なのではないのでしょうか。逆に言えばむしろ秋田という核をおいて、それぞれの暮らしのあり方と産業というのは一緒ですから、それらを交通ネットワークで結ぶ、その形での地域づくりというものを多分お考えになっているとは思いますが、いろんな切り口があるのかなと思っております。その場合、別に自分は道路族でも何でもありませんけれども、基幹的交通ネットワークというか、そういうものが非常に重要だと思っております。青森の場合、自分の町から下北へ60km位離れていても、平気で農業をやりに行くんですよね。使える道路があれば何処へでも行って稼ぐ。面白いなと思ったんです、青森の人間は。そういう部分もありますし、これからは北東北が、先程エネルギーの話をしましたけれど、分散型の電源とか熱源、要するに地域単位でいろいろな事をやるようになれば、住む所、働く所の仕分けをして、そこで住む所、行って働く所という形が面白いのではないかなという事を自分なりに考えています。本県の場合、3極がきちんと結べるような形を、26km切れている所がありますので、やらなければいけないなと思っております。ともかく、お互い地域単位、良い意味で競い合うことは非常に重要だと思っております。

最 後 に

三村知事：最後にまたご挨拶をさせていただきますが、取り留めのない話を申し上げました。常に一つだけ、「己は己が見ている」、絶対にこの部分において間違わずに歩むという気持ちでやって参りました。

秋田県の職員の皆様方もまさにお一人お一人が県民でございます。そのお一人お一人が感じる事が考えることがもの凄く大切な事なんだと思います。秋田県そのものがまた良い形で進んで行くにあたって、それぞれがそれぞれを自分で見つめる時を作るような、そういう形での公務員生活を送っていただければと思います。公務員というのは権限・財源を上手くやればやれる訳ですから、これほどやりがいのある仕事はないと思います。選挙毎にどうなるか風前の灯火という我々と違いまして、皆様方においてはガッシリとした信念を持ってお仕事を進めていただきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。